

Title	「是」のムード特性
Author(s)	大河内, 康憲
Citation	大阪外国語大学学報. 33 p.21-p.39
Issue Date	1975-01-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80538
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「是」のムード特性¹⁾

大 河 内 康 憲

Modality of 'Shi' (是) in Modern Chinese

ÔKÔCHI Yasunori

SUMMARY

It is a well-known fact that the Chinese verb 'Shi' (是 'to be') is not affected by case, number or tense. The notion 'Locus' established by an European linguist in order to account for a dummy verb loses its force as soon as we take the verb 'Shi' into consideration. It should also be noticed, in this connection, that 1) 'Shi' occurs very often in verb phrase being grammatical without adding copula, as in “他(是)去”, 2) most of the adverbs can be followed by 'Shi' having slightly difference in meaning, not in syntactic function, as in “你还(是)去麼?”. This paper attempts to show, in the light of such usages, that the peculiar properties of 'Shi' should be accounted for from the viewpoint of modality, and in passing to make clear what appears to be an emphatic marker.

1. be 動詞

John Lyons は be 動詞というものについて次のようにのべている²⁾。要点をまとめると：

「Mary is beautiful」や「Mary is a child」のような文で be 動詞をとらない言語はいくらかある。印欧語において be 動詞に繁辞的用法が出てくるのは第二の発展段階としてである。このことは現在のロシア語で上の例が「Marija krasivaja」, 「Marija rebënok」のようになることにもうかがわれる。ギリシヤ語, ラテン語においても同様である。ただこれらにおいて注意すべきは, それが過去時であったり, 叙実法以外のムードであるなら, 必ずこの be 動詞がそれらの時や法にふさわしい形をとって現われなければならないということである。そこでわれわれはこのような言語の be 動詞を locus —— つまりある種の syntactic structure の明示的な形式を乗せるためにのみ導入された表層の要素にすぎないものということができる。換言すれば, 意味的には空虚な dummy verb であり, 他にそれを表示しうる動詞があらわれない時に, その必要な文法的区分を示すためにのみ加えられるものと考えうる。be 動詞のこのような性格は英語のような言語にも一般化して考えられてよい。時や法や態に marked である言語のみならず, これらに unmarked である言語の be 動詞についてもいえることである。この

ような理解の妥当性は多くの点で支持されるが、「Mary is beautiful」の is は、「Mary cooks fish」の cook などとちがって、それと対比できる動詞が他に become くらいしかない (stative +, - という点) というのもそのひとつである。

といった内容である³⁾。中国語の「是」が単純に be 動詞でないことはいうまでもないが、繫辞としての理解が優勢な「是」をこの説明と並べてみるといろんな点で興味深い。しかしなによりもわれわれの関心をそそるのは、中国語の「是」はけっして locus でないということである。アスペクトでは marked である中国語のそのアスペクトに関して、「是」はむしろ極端に拒絶的である。繫辞が語彙的意味の空虚な dummy verb であるとするなら、locus でもない「是」は一体なにを示すものか。「是」はその存在意味を失わねばならない。しかし「是」は繫辞的用法である名詞文においてむしろ不可欠なものとして存在する。ただことわらなければならないが、筆者は屈折語と孤立語との差をことさらに無視して議論しようというのではない。屈折語の be 動詞に locus といった考えが妥当するなら、「是」にはそれとまつたくちがった機能が考えられねばならず、それがなにかということに関心を寄せているのである。少なくとも主要な名詞文における機能で、繫詞用法という関連がある以上、両者に類似が求められるのは当然であるが、それは内実において大きく相異なるかもしれないと予測させるこの比較に興味をおぼえるのである。もち論、繫辞について locus という理解は必ずしもそう一般的なものではない。佐久間鼎氏の⁴⁾ように、断定措定の語詞として理解し、名詞文に繫辞のあらわれない言語の事情を、氏のひくヴェンドリエスのように説明する——動詞文とちがって名詞文は本来、時や法とかかわる必要がないというふうに——ことが可能である。しかし be 動詞が時や法に従って変化する⁵⁾、むしろそれが有効に利用されているという上の事実に対して説明力をもつのは locus という理解であり、繫辞についての一般理論として受け入れられてよい。そこで、中国語の「是」が繫辞とされながらも、この理解からみれるという事実はどう理解するのか。いわば孤立語のなかにおける虚字というものはたす役割の一端をうかがうものとして「是」を考えてみたいというのが本稿の出発点である。

2. 副詞的な「是」

名詞文における「是」の用法を真正面から追ってみても、「是」の特徴的性格をつかむことは難しい。「主辞——繫辞——賓辞」という形は他とかかわらないからである。そこで少し視点をかえて、次のような文中における「是」を考えてみよう。

1. 你是不想走啊？
2. 我是多麼寂寞啊！
3. 在這樣的天气里，人們是不大願意出来。

これらの「是」をどのように説明するかはやはり難しい。一方で「我是学生」のような文の「是」に与えてきた説明をふまえなければならないから、諸説分岐する。もっとも普通には「強調」(つ

まり emphatic marker) であるが、筆者はなぜ強調になるかが説明されない「強調」は、説明の回避であり、遁辞に近いと考える。もち論、これらの「是」は省いても、文の基本的成立をおびやかすものではなく、後が名詞化された体詞謂語句とはいいいがたい。たとえば2は述部が感歎句である。「ワタシハナントサビシイノカ！」を「ワタシハナントサビシイ人間デアロウカ！」と解するのは、一般に指摘されるとおり、やはり古典形式論理学にとらわれた「笑うべきパラフレイズ」であろう⁵⁾。文末の「啊」は「是」との関連で文末についたものというより、「多麼……啊！」という一般の感歎文のフレームと理解すべきであろう。その方がより一般的原則にかなっているし、この場合が特にそうでないという理由は見出せない。3も「コウイウ天気ノモトデハ、人人ハアマリ外ニ出タガラナイモノダ」であって、「人人ガソウイウ種類ノ人間デアル」という包摂判断をおこなっているのではない。このことは「知道」のような動詞の目的語のなかにあっても、同様である。次の例文における「是」は、「他」と「逗他」を結んだ繫辞とは考えられない。

4. 李大娘这时才知道他是逗她。

今、問題を「是……的」構文に拡大する余裕はないが、「这个事ル是麻烦的。」の「是麻烦的」を体詞性謂句とみる学者が意外に多いにもかかわらず⁶⁾、上と同様の論議のできる「是…的」は多数ある。譚永祥は「是」や「的」がその文中で省略できるか否かを基準として、同じく「是…的」構文であっても、体詞性謂語句を構成するものと、そうでないものとを分けているが⁷⁾、次の文中における「是…的」を体詞性のものと断ずることはできない。

5. 惠这一天是不出来見客的。

6. 女朋友是多的。

7. 書，他是撕不完的。

一般に動詞文より形容詞文の方が性状表現であるため体詞性のものといいやすいが（たとえば「这是好的」のように）、しかし6の「多」のような形容詞をとると、体詞性のものとの差は明瞭に出る。次の二例は動詞文である。8を体詞性謂語句としても、9を体詞性のものと認めることはできないであろう⁸⁾。

8. 这三樣東西是哥哥買来的。

9. 我是来請假的。

9の「是」や「的」は随意的なものであり、「用来表示強調語氣」に当る。そこで今、多少結論的にいえば、これらの「是」は語氣副詞に近いということになる。ただこれを副詞といいきったのは張静が最初であり、比較的新しいことである。従来と現在とを問わず、他の多くの支法家は一般に齒切れが悪い。張静はその間の事情を次のように評している⁹⁾。

总之，没有一個人把这个「是」字干脆叫做副詞。為什麼？大概有兩方面的原因：一是只注意了用在体詞，動詞，形容詞前面的「是」字本身的共同意義——表示判断或肯定，没考慮「是」字在各種不同句型中的結構作用：一是怕擴大同音詞或一詞多類的範圍，給初學語法的人帶來麻

煩。

張靜は、「是」に副詞のみならず、接続詞をも設けており、筆者は必ずしもこれに賛成しない、というより品詞論的分割に関心をもたないが、従来より副詞といいきった人がないという指摘は、やはり、名詞文の繫辞用法にひきずられて広範な「是」の説明を胡塗してきた実情を語っていると思う。その意味においても、「是」という副詞の設定は、「是」についての理解を整理する上で一歩を進めるものであったといっていよい。周知のとおり、「是」には馬氏文通以来、断詞、判断詞という名称がある。後にのべるように、これは「是」のもつムード特性をうまく語るものであるが、一体これは機能範疇であるのか意味範疇であるのか。張靜の上の指摘は人人の疑問をよく代弁している。「是」が繫辞であると同時に、というよりそれ以前に、語気表示の形式語であるという性格が追求されなければならない。

3. 「只」と「只是」

ごく一部の副詞を除くと¹⁰⁾、大多数の副詞は直後に「是」をとることができが、この「是」は一体どういうものなのか。「是」をともなった副詞と、裸の副詞との間にはどのような差があるのか。たとえば次の文中にみられるような「是」をとりあげてみよう。

10. 他也許是把書扔出去吧。

この「是」は文の成立のためにはなくともよく¹¹⁾、「也許」と「也許是」がきわめて近いものと考えられる。しかしまったく同じでないことはいうまでもないから、「是」の有無によって生ずる差はなにか、どう理解すべきかが問題になる。

ただ、この問題に入る前に単位の問題にふれねばならない。つまり副詞と「是」は上にのべるように一単位と考えてよいのか。個別的な二語が並んだからといって、すぐさま並ばなかった場合と比較してよいのかという批判が生ずるであろう。むしろこの煩雑さが、この問題の検討をおくらせてきたとも言えるが、ともあれ、岩波中国語辞典は次にあげるAを一語と認定し、Bを二語と認定しているのである（一語としての記載がない）。これは副詞と「是」との関係のとらえにくさを物語っている。

A) 就是，还是，都是，只是，总是，正是，老是，倒是，……

B) 也是，又是，真是，更是，竟是，顯然是，到底，究竟是，簡直是，……

「都是」が動詞として一語であるのに（例文は「他們都是學生」）、「也是」が「也」と「是」に分けて理解されねばならない理由はない。また「还是」は副詞のみで動詞がなく、「总是」などは動詞のみで副詞の記載がないが、これを破る例はいくらかもある。さきの張靜は後にくもの動詞や形容詞のとき、副詞と「是」との間に他の要素が入るかどうか（たとえば「他大概是想看戲。」→「他大概是想看戲。」）によって、合成副詞とそうでないものを分けているが¹²⁾、これは黎錦熙や劉世儒の「是」を副詞語尾とする考えを¹³⁾、合理的に発展させたものといえる。しかし、ともあれわれわれにとって当面この問題はさほど重要でない。「也許是」が全体で一単位である

うとも、「也許」に「是」が加ったものであろうとも、10の例文においてこの二つはひとしく文の成立をおびやかすことなく自由に出はいることができるわけであって、パラディグマティックに同じ類のなかにある。とすれば、問題は一方に「是」がふくまれており、他方にはそれがないというだけで、機能的にはほぼ同じとみられるこの両者の、意味上の細部の差を追えば、それが「是」の性格の一端を反映しているであろうと考えられるのである。そのためには、同時に、先の議論でいうまでもないことだが、後に名詞のくる例、つまり「是」が繫辞と解されうる例を除いておいた方がよい。本質的には繫辞においてもかわりないが、立論の手順として、さしあたりはさけて通った方がよいであろう。

副詞が裸の場合と、「是」を伴った場合とで、差が比較的明確に生ずる「只」についてまず考えてみよう。あまり注意されないことであるが「只」が単独で動詞や形容詞の前につくときには、その後に数量詞を含んでいることが多い。たとえば：

11. 他只復習了半個多小時。
12. 班里只剩下他一個人。
13. 他比我只大一歲。

のようになる。これは動量や時間のみならず、12もそうであるが、目的語につく数量限定語であってもよい。たとえば：

14. 三個月内只花了一瓶墨水知八兩棉油錢。

もち論これは大まかな頻度の問題である。これにもれる例はいくらかもある。特に介詞構造状語をもつものや対比形式のものに多いが¹⁴⁾、一般的傾向としては注意されてよい。

ところで、これらの例をみていえることは、この種の「只」は動作を限定しているというより、その述部のなかに含まれる数量を限定しているということである¹⁵⁾。たとえば、11は「復習ダケヲシテ、予習ハシナカツタ」という意味ではない。種々の勉強やあそびのなかから復習だけを選定したのではなく、ただ復習が「半時間余リニスギナカツタ」というその長さが問題である。13も「大キイダケデ、力ガナイ」といった意味においていわれているのではなく、「大キイ」のは分っているが、それが「わずかに一歳である」という一歳についての限定と考えられる。もち論これは厳密な論議をすると難しいことで、「只大一歳」の発話時の話手対聞手の了解や、文脈における注意の所在が「大」にあるのか、「一歳」にあるのか、それとも「大一歳」全体にあるのか、一律に決することはできないであろう。ただ一般的に言って、この種の文では、「只」という限定語が数量詞の直前におかれることもないではないが（たとえば「在民兵中持有這種看法的人，不只海花一個。」や「從我還能記得的時候起，我就只一個人。」），より一般的には述語動詞や形容詞の前におかれ、動詞、形容詞そのものではなく、むしろその後に生起する数量を限定するのである。「彼ハ知ラナイダケダ」という日本文は初学者に作文させると、「他只不知道。」となるが、このような中国文は通常存在しないといってよい¹⁶⁾。「只是他不知道。」、「他只是不知道。」、「只有他不知道。」のいずれかが使い分けられる。「事實ハ事實ダ、彼ガ知ラナイダケダ」となれば、

「事实是事实，只是他不知道。」となるであろう。「知ラナイノガ彼ダケ」の意味に偏していれば，「只有他不知道。」となるであろう。「彼ハ笑ウダケデ，ナニモ言ワナカッタ」などでは「他只是笑，没有說什麼。」が普通である。

一方これに反して，「只是」を含む例文は次のようなものが多い。

15. Ahasvar 從此就歇不下，只是走，現在还在走。
16. 宏兒没有見過我，遠々の对面站着只是看。
17. 吳媽只是哭，夾些話，却不甚听得分明。
18. 我問他的情况，他只是搖頭。

いずれも魯迅からの例文であるが，直後の動作を問題にしていると見られるものが多いのである。これらの例では「只」を「只是」におきかえることは不可能であろう。「只」は日本語の「ダケ」などどちがって裸で動詞や形容詞と接続して，「その動作，様態だけ」の意味をもたらすことは難しい（「只是」は形容詞と結ぶと「老栓只是忙。要是他的兒子……」のようになる）。「只」が動詞，形容詞と直接結ぶ場合には，しばしばイディオマティックな意味をもたらすものである。たとえば「只看，只听，只管，只顧，只得，只好」のようになる。もっとも知覚，心理活動動詞には「只」とよく結ぶものがあり，これは別に考えるべきかも知れない¹⁷⁾（たとえば「只觉得」，「只記得」など）。このほか「只」がつきやすいものには，一部の助動詞があり，「只能，只会，只願意，只要……」のようになる。助動詞に准んずるものとして「只怕，只算」などもこの部類に加えられる。ともかく以上のような事実は，少し概括して言えば，「只」は「只是」や「只＋助動詞」となっているのはじめて述部の中心的な動詞や形容詞あるいは述部全体を限定することができ，「只」だけではその力は弱く，多くは述部中に含まれる数量表現などを対象とした限定語になりがちであるといえるであろう。少くとも，そう理解しておいた方が説明のしやすい例がはるかに多いことは重視されねばならない。

そこで，この事実をさらに一般化して考えると，「只是」は話手の主張に積極的に関与するものであり，「只」とはその点において異なるものとみられる。つまり「只」は話の内容そのものであり，「只是」はこれを包む話手の立場の表明，つまり主体的表現の部分である。俗にいう「只」は「内のもの」で，「只是」は「外のもの」とみられる¹⁸⁾。「是」をともなっているものはムードに接近し，ともなわない方は，客体的表現として，事実のレポートの方に偏するのである。「只是」が「只＋助動詞」に近いというのはこのことを裏書きする。またしたがって文末の「罷了」や「而已」と関連するのも，「只」より「只是」の方が普通である。これは後にのべるように，モダリティの表現がこのような位置の関連でおこなわれるのが，中国語の常態だからである。

19. 这些只是表明經濟關係的要求而已。

4. 「還」と「還是」など

「只」と「只是」にのべたことは，「还」と「还是」などにおいても当てはまる。たとえば次

のような例文において、左の「还是」を右のように「还」におきかえることはできない。

20. 你还是去的好。→ *你还去的好。(*は不成立を示す)

21. 我們还是坐汽車去吧。→ *我們还坐汽車去吧。

また逆に、次のような例においては「还」を「还是」に改めることはできない。

22. 他跑得比風还快。→ *他跑得比風还是快。

さらにまた、次の二例では、「还」と「还是」の使いわけによって顕著な意味のちがいを生じている。

23. 他今年还没有回来。

24. 他今年还是没有回来了。

23は「マダ帰ッテイナイ」の意味で、「还」は時間と密接に関連したものであるが（後にのべるとおり、時間副詞は後が動詞のとき「是」をとりにくい）、24は時間に関係するものではなく、また「カレ」の意向とかかわるものでもなく、「彼ハ今年ヤッパリ帰ッテコナカタ」という、話手の年末の概歎である。また次の25、26を比較されたい。25は「サラニソノ上」の意味で量にかかわるが、26の「还是」は屈折した話手の思考の過程をあらわしている。

25. 学字呀，还有很多好处。

26. 这麼説，当民兵对我們窮人还是有好处阿。

したがって、一般に不断不決定の文末助詞「吧」と呼応するのは「还」より「还是」が普通である。

このような現象は、他の多くの副詞においても程度の差はあれ、広く見られることである。いくつかの例をあげておこう。

27. 真是翻身了，瞧着吧，往后的日子。

「真」という副詞はあるが¹⁰⁾、この「真是」を「真」に改めることには抵抗があるろう。

28. 这个国度和别的許多国家一样，也是有国王的。

「也」におきかえたときとの差はなんとかよみとれる。「也是」は「ヤッパリ」の感が深い。

29. 这一学期，小庄門門功課的成績都是優秀。

「都」だけに比して話手がより説得的で肩入れしていることがうかがわれる。

30. 我們淑紅倒是和道疼人。

31. 老李簡直是奉承他，說服他。

いずれも「是」がなくてよいが、話手のその部分に対する思い入れがちがうし、主張の仕方に差がある。この点では次の文にみるような、程度副詞に「是」のついたものも加えておかなければならないであろう。説明が難しいが、話手のその部分に対する関心の寄せ方に大きな差があることは、この文を理解する人にとって明白である。

32. 他心里很是難過。

33. 他瘦小個子，很是靈活。

34. 那千千万万条梯田埂子，衬出了一綫綫折紋，更是好看。

もっとも、これらには文言の「極為……」，「甚為……」などのアナロジーを考慮に入れる必要があるかも知れないが²⁰⁾，ほとんど二音節形容詞である。

ともあれ、このような事実を少し普遍化してみると、裸の副詞と「是」をともなう副詞というものの間には、大略次のようなちがいを認めることができる。

第一に、複句（緊縮句を含む）で主句と従句を結ぶために主句中にあらわれる副詞（一般に関連詞とよばれるもの）は、「是」をつけ加えることができない。条件句や譲歩句において特にそうである。たとえば次の文中の副詞を「是」をともなう形に改めることはできない。

35. 我一提这儿的事，媽媽就把話岔開。

36. 我不問也明白。

次のような二文を対比すると、「是」のはたしている役割がよくわかる。

37. a) 不学就不会。 b) 不学就是不会。

aは条件句であるが、bは前後の二項間に示された判断である。もち論この際、bの「不会」を名詞性のものとみるかどうか微妙である。しかしいづれにしても「就是」のはたらしめには本質的なちがいはない。また名詞性のもの、動詞性のものというのは、結局それが形式に出ない言語では認識の問題、認識の整理の仕方の問題にすぎない。たとえ名詞性のものといっても、それは、判断の対象や内容は名詞性のものとなって論理的認識のなかで落ちつきを得るということを認めるにすぎない。

第二に、時間をあらわす副詞は一般に「是」がつきにくい。もち論これには例外もあるが²¹⁾，単純に時間をあらわすために使われているときは「是」をともなわないのが普通である。たとえば「再，将，馬上，連忙，立刻，漸漸……」などの副詞が動詞文に用いられるとき、「是」をともなうことが少ないのを想起されたい。次の文には「馬上」と共起する「就」があるが、これに「是」をつけ加えることはできないであろう。

38. 紅軍馬上就来。→ *紅軍馬上就是来。

この「就」は「スグサマ」の意味で、単純に時間を表示するものとしてこの文中に定着している。「就」が「是」をとると排他的確認になるからである（たとえば我們来革命，就是要和反動派斗争到底，のように）。

第三に、これは逆の方向からのべた事実であるが、文頭にくる副詞は、機能上「是」を必要としないものであっても、「是」をともないがちである。「是」を取った方が安定度を増すといっべく、現実に見る文はその方が多い。たとえば：

39. 原来是一大帮鬼子從大路上走来。

40. 究竟是誰叫你搬動我的小箱子。

などである²²⁾。文頭にきうる副詞とは文修飾副詞といわれるものであり、本来語気をあらわすモーダルなものである。したがってこれが「是」と結びやすいというのは容易に理解できる事実で

あろう。また機能の上からは当然のことであるが、一音節の副詞は主語の前に置くことができないが、「是」をともなうことによって可能になる。たとえば：

41. 他總不知道。→ *總他不知道。

他總是不知道。→ 總是他不知道。

しかしこれは視点をかえると、「總」が「總是」になることによって文修飾副詞としての機能を獲得したわけであり、「是」が一音節副詞につけ加えるところの意味、つまり、より外のものとして副詞を定着させるはたらきと見てよいであろう。後にのべるが、元来、モーダルなものが文中で占める位置はかなり固定的で、文頭および述語の前後両端である。「總是」などはこの前の二つのところに自由に生起しうるわけで、それは話手の態度を表明する挿入句が生起するところとも一致している。たとえば：

42. a) 看起来，这天气快要下雪了。

b) 这天气看起来快要下雪了。

43. a) 依我看，他說的对，这山上怎麼不能出黄金？

b) 你才說的那三層呀，依我看，都没什麼的。

これらの「看起來」、「依我看」は標準的な挿説である。「你想」、「你听」、「你看」のようなものにおいても同様である。

「特別」や「主要」は、それ自身では名詞というべきであろうが、「是」をともなうことによって文修飾副詞に転んずる。

44. 特別是飛機少不了這種有机玻璃。

この「特別」を主語、「是」を繫辞とみるわけにはゆくまい。「特別是」を副詞とみなしなければならず、「是」は文修飾副詞を作るための接辞とすらいえる。事実、「或是，雖是，可是……」などはその類であり、文頭にくることが一般化するにつれ接続詞という名称を得たにすぎない²³⁾。次の「看来是」、「接着是」なども同じ事実を語るものである。

45. 看来是他满足于形式上的改变。

46. 接着是工人和居民代表講話。

次例は「是」の前後でまだ主述を認められそうな、いわば過渡的なものである²⁴⁾。

47. 結果是我便将这托尔斯泰式的信退还了他們。

第四に、これは周知のことでもあるが、否定文において、「不」と「不是」で否定の及ぶ範囲にちがいが出る。たとえば：

49. a) 他們不用日文講話。

b) 他們不是用日文講話。

aは「講話」はするわけだが、bでは全体が否定される、とされている。英話では「I did not married her because I loved her.」が二義的（「愛シテイルカラ結婚シタトイウノデハナイ」と「愛シテイルカラ結婚シナカット」）とされる点を「不」と「不是」の使いわけで逃がっているの

ある。この「是」は「能」のような助動詞でも同じことが成立する点は注意されてよい。また、たとえば「這兩個檢拳人都不是直接了解，也是听過去在炮楼上呆過的人講的。」のような文における「不是」は、「不」におきかえた場合との意味の差が明瞭である。「不」では「……シナイ」であるが、「不是」では「……シテイルノデハナイ」となり、その否定の責任の所在が話者にあることがより明白になる。

ともかく、これら四点にみられる性格は、さらに約言すれば、「是」は話手の主体的態度の表明であり、ムードであり、その語彙的形式による表明と理解して大きな誤りはない。ある種の副詞との不可欠な共起といい、文頭の副詞との協調など、いずれも話者の主体性の表明、主張の必要を補うものとみられる。

5. ムード

次のような文の対比に注意されたい。

- 50. a) 大哥也不知哪里去了。
b) 大哥也不知哪里去好。
- 51. a) 你想是先生了。
b) 你想些什麼？
- 52. a) 你怕在等女朋友吧。
b) 你怕人家見笑。

これらのbの側の「不知，想，怕」は主語自体の行為とみられ、「兄モ知ラナイ」，「アナタガ考エル」，「アナタガ恐レル」であるが，aでは「兄ハドコヘ行ッタコトヤラ」となり「外のもの」，つまり「大哥」や「你」にかかわりない話者の側のものである（「想」に「是」がつくのは注意されてよい）。もっとも，厳密にはaは二義的というべきで，「大哥」自身が「不知」の場合も考えなければならないかも知れないが，ともあれ，bはつねに一義的なのである。ちなみに，aの側にはこれらの語の後に「是」を補いうるが，bの側には補えないか，乃至はきわめて難しい。

外のものになりうる動詞は，さらに拾うと，他に次のようなものがある。

算，要，配，看，説，猜，料想，不知道，不晓得，不妨，不准，不許……

これらは次のような用例で想起されたい。

- 53. 你兒子還算給咱民族，給咱国家出名了。
- 54. 你不妨跟我一起拍個照。
- 55. 全家都不准出門。
- 56. 学校招生的名額説要增加了。
- 57. 这小孤婦不知道鬧着什麼玩意儿了？
- 58. 这孩子料想不能長大。
- 59. 直到上灯時候，連四斗子也不見回来。

最後の「不見」はかなり副詞的である（「不見得」も含め）。「不准」などは「不准你們兩個登記。」であっても「你們兩個不准登記。」であっても基本的にはかわらない。そのことは「要」において、「菜？ 十個油豆腐。辣醬要多」のような文を作文するのが難しいのと同じで、多くの初学者は「我要辣醬多。」と「我」をつけて「要」を外に出す。主体的表現と客体的内容とをできるだけ分けようとするのが論理的の整理を経た思考であるらしい。しかし現実に見る文ではいくらかでも内に入ってくるわけであって、「顯得」のようなものは、文頭に置けないけれど、内のものか外のものか微妙である²⁵⁾。「顯然是」となれば文頭に出るのが普通であるが、そのあらわしている意味に大差はない。

このような考えの外延は、「比較起来」のような挿入句にも広がる。たとえば：

60. 这些學生們，比較起来，还是他們的記性好。

いわゆる「挿説」とはその起る位置からの名称にすぎない。もたらす意味は概して外のものであり、「比較」するのは学生たちではない。

このことはまた広く助動詞において起る現象でもある。中国語にも法助動詞に相当するものが多い。王力が助動詞について、次のようにのべているのは、このことを指している²⁶⁾。

我們在「能」「可」等字的職務上，雖然感覺到弁別的困難，然而它們把主觀的成分加在客觀的行為上，这一点却是很顯明的。因此，能願式亦可稱為主觀式。

藤堂明保氏は助動詞の一部を「情意詞」と名づけて、ムードをあらわすものと断定されているが、同じ考えにもとづいている²⁷⁾。機能的にのみいうなら、「是」にかかわって、他の動詞はダメであっても、「能、可能、会」などで代替できるところは少くない（たとえば「不是不……」と「不能不……」や「只是……」と「只能……」など）。この種の助動詞は直後に「是」をとりうるが、この点では、知覚や認定をあらわす動詞に近い²⁸⁾。

さきに「只是……罷了」の関連用法にふれたが、一般に中国語で文末とのイディオマティックな関連が指摘されているものは、ほとんどモーダルなものと考えてよい。たとえば次のようなものである。

不過……罷了。 象……似的。 不是……麼。 難道……麼。 必須……才好。

可不……麼。 非……不可。 大概……吧。 当然……了。

文末助詞と副詞との関連をいえばまだまだあるが、これらが示すところは、客体的事実あるいは一次的にレポートすべき内容そのものではない。それを外からとりまいて、それに附するところの話手の意向や話手の「位置」の表示である²⁹⁾。文末語気助詞といいがたいが、「必須……才好」の「才好」にしても、ここでは「ソレデハジメテヨイノダ」と訳されねばならぬような実義をつねに託して使われているとは思われない。たとえば、「你們必須帶着問題學習才好。」は、「必須」が「才好」と関連することによって、「ゼヒ……シナケレバナラヌ」ということを強くいったにすぎない。文末助詞との関連を考えてよい。次のような例においても同様である。

61. 你要体会公私等顧的精神才是。

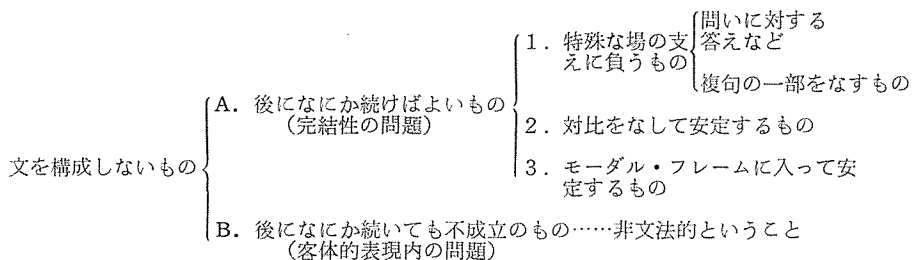
62. 这不能。須大雪下了才好。

これらの関連用法は推量，反語，必要などを示すものが多いが，「是……的」もやはりこの一種である。これが強調を示すというのは，この関連によってもたらされる積極的な肯定判断があるからであって，それは当然「是」だけ，「的」だけでもよい。「是……的」を特に強調の形式として固定的に考える必要はない³⁰⁾。しかしとは言え，これらの関連は安定のよいモーダルな枠を構成するわけであって，このような視点に立つならば，中国語の文というものは，一般に次のように構成されると考えてよい。Mとはモーダルな要素である。

$$M_1 + \boxed{\text{主語}} + M_2 + \boxed{\text{述語}} + M_3$$

Mは文頭と述語の前後を占める。ということは，「主+動+賓」という三分法は面白くない。しかし，ともあれ今われわれが確認しておいてよいのは，文中の位置のもつ意味である。文頭や述語の前後にくることばは，ものによって多少性質はかわっても，本来，話者の立場とかかわって表出されたものが多いということである³¹⁾。これは生起する語というより，その位置のもつ意味と考えてよくその位置にその種のことがあらわれて，文としての安定を得るのである（このような考えは「有定」，「無定」にもある）。

附言すると，中国語では文の成立不成立，つまり文と非文との差を問題にするに当って，「それでは言い切りにならぬ」ということがある。これを文法的非文法的という概念と同じく扱うかどうかは研究者の文法観とかかわって微妙であるが，基本的には次のように考えておいてよいと思う。



狭義に非文法的というのはBのみであるが，Aは完結性の問題として文法にかかわる³²⁾。文の完結性に関与するものをいくつに分ければよいのか，なお検討を要するが，もっともこの種の問題を扱ってよく接するのはAの1，2，3であろう。問いに対する答えは，きわめて狭義に文法的でさえあれば，ほとんどどんな文をも成立させるし，複句の一部をなすものは，単独ではとても不可能な文を可能にする。また肯定，否定の対，「他」と「我」との対のように，対比してのべられた文は，相対する部分に支えられて成立するところが大きい。しかし，これらのうちでもっとも日常的であり，文の安定にもっとも寄与するのは，なんらかの形でモーダルなフレームの中におかれることである。文末の「了」の有無が問題になるのはこのことであるが，話者からかけ離れた文がいかに成立しにくいかは銘記されてよい。これらをすべてパフォーマンスの側にゆずり，文法研究をBに限定する立場に筆者は賛成できない。

国語学には山田文法以来の「陳述」についての論義（ときには論争）がある。「文が完い思想、感情の表出である」というのは、ややもすれば主述ととのって完いと考えられがちであったが、それは言語事実がそうであるからというより、論理判断がそうであるということに依存していた、という反省は正しい³³⁾。時枝文法の、文の成立の根本条件を、文中辞に対する文末辞のはたらきで説明する考えは、われわれが当面する言語においても有効な方法であろうと思う。少なくともこのものの文法論での位置づけがしかるべくなされない限り、「了」などの問題の解決はない。

6. 「是」のはたらき

再び論点を「是」にもどす。「是」が動詞の一種とはいいいながら、話者の事実に対する態度の表明であるという考えは古くからあると考えてよい。大体「判断詞」という名称がそのことをよくあらわしている。しかしこのことをより鮮明に主張したのは、次にあげる洪心衡と藤堂明保氏であろう。

従来より「是」の繫辞用法の起源については王力の説が有力である³⁴⁾。すなわち、「富与貴，是人之所欲也。」のようないわゆる複指の指示代詞（王力はそうみる）より転成したとし、「非」に対する是認の「是」はただ、「其友識之，曰，汝非予讓邪，曰，我是也。」のような文中での「是」に限るべきであるとする。

しかし洪心衡は「非」に対する「是」のはたらきを基本的なものと考え³⁵⁾（もち論「彼」に対する「此」の意味もあるが），その一般化として繫辞用法が出現した，と王力説を改めている。次のような「是」「非」の対立する例をあげ：

63. 而居堯之宮，逼堯之子，是篡也，非天与也。

64. 故王之不王，非挾泰山以超北海之類也，王之不王，是折枝之類也。

もし「非」が否定の副詞なら、「是」は肯定の副詞とすべきであるとして、次のようにのべる。

如果把「非」字看作副詞，那末「是」字也應該是一樣。何況古代漢語「誠，皆」等都可直接用名詞前邊（如「誠齊人也，皆薛居州也」）。就是在現代漢語，「是」字還可用在動詞謂語前邊，一般也解說是表示強調，是「實在，確認」的意思。這大概是古代漢語遺留下來的用法吧。……因為「是」可用作表示確認，加強語氣，而經常用在作謂語的動詞，形容詞或名詞及其詞組前邊，因此到後來就產生了一般所謂系詞「是」的用法，經常用來連系主語和名詞謂語，而不重誦了。そしてこの傍証は，「是」の繫辞用法の発達にもなって，「此」との分業が成立したことによっても得られるという。この主張によれば，「是」は繫辞用法以前に肯定の語気副詞としての用法があるわけで，本稿が最初にあげた例1，2，3などは怪しむに足りない，というよりむしろ本来の用法である。

一方，藤堂明保氏は次のように明快にのべられている³⁶⁾。

「我不去」の「不」は，話手の拒否の意向をつける虚詞である。してみると，「我去」という肯定のばあいにも，何らかの肯定の気もちをつける虚詞がうちにひそんでいると考えることが

できる。いわば「ゼロ記号」として、「我ゼロ去」の形で存在すると考えてよい。それ故に、「私はたしかに行くんだ」というように、強い承認の気もちをつげるときには「我是去」という形であらわされることがある。

両氏の考えはほぼ同じ「是」の理解の上にたっている。繫辞用法を本来のものとみないで、否定に対応するもの、否定とは明らかに判断の表出であるから、その対極として肯定の判断の表出とみるわけである。この理解はわれわれが上にみてきた「是」についての考えと一致する。いうまでもないことだけれど、否定とは、判断や主張のもっとも普遍的にみられる明示的な表示形式である³⁷⁾ (方向が逆というだけ)。二重否定が強調になるというのは、この否定がもつ判断、主張を利用したものであり、いいかえれば肯定の積極的主張がそのままではむづかしい、適当な表示を欠くことを物語るが、しかし「是」はまさにこの肯定の側の積極的主張の辞として存在するのである。それはまさにモダリティの語彙的形式による表示以外の何物でもない。

少し具体的問題に入ると、次の対比において a_1 と a_2 でその差をいうことは難しいが、 b_1 と b_2 では明らかである。 b_2 は不成立である³⁸⁾。そのことから逆に、 a の側の性質の差を知ることができる。

65. a_1 吉田班長叫你干麼? → b_1 吉田班長叫你干什麼?

a_2 是吉田班長叫你干麼? → b_2 *是吉田班長叫你干什麼?

b は客体表現のなかに疑問の内容を含んでいるが、その際、「是」は同じ意味の疑問文として共起できない。ということは、「是」を含む a_2 は「是」がモダリティとして外に出て、疑問はその判断の妥当性を問うものとして成立しているということである。「真空地帯」の原文は「(吉田班長にたのまれたなら、たのまれたといえ) ……吉田班長にたのまれたんやろ……(おい!)」で、訳文は a_2 であるが、原文からわれわれが感じとるものは、発話者が自らの判断の可否を問題にしていることである。事実について話者は明らかに先入主がある。要するに：

是 吉田班長叫你干 ?
↑ ↑
modality proposition

と考えられる³⁹⁾。

「是」ではじまる文で、「是」の前に補うべきものが明白でない例はいくらかもある。たとえば：

66. 昨天差点暈倒田頭，是大伙儿硬把她攙回家来。

67. 是江姐，媽，你去開門！

これらの文中の「是」はなにを承けているというべきか。67はまだしも「戸ヲタタイテル人」といえようが、66ではすでに「把」によって「她」が導かれており、論理的に適当なことばがきまらない。「是」がなにかをこれらの文とを結んでいて、そのなにかがこの場合省略されているという言い方は当たらない。当然この「是」は、前にも後にもなにもとらない次のような「是」につながっている。

68. 你也和他一伙？ 是吧！

「ソウダロウ！」と訳されるが、「ソウ」とはなにか。やはり前述のことがらについての判断の妥当性をただすものであり、65のように、「是」が文頭に加えられた形とかわらないのである。

趙元任は「是」の用法の分類のなかで、“Predication with a more loose relation between S and O”という項を設け⁴⁰⁾、「我們是兩個男孩兒」のような例をあげるが、実は、これも上へのべたのと同様に理解すべきである。次にあげるような例は、「是」がルーズに前後を結んでいるというより、他と区別して提起された主題に対して、判断としての説明が附されているといった方がよい。「繫」にこだわるのは事実の異った側面を誤って印象づけることになる。

69. 他是死心塌地的反革命。

70. 这几天是退一步想。

71. 我覺得臉上是澆了一盆冷水。

したがって、次のような動詞文においても、「是」をとることによって、「他」の行為をのべるというより、「他」についての説明をおこなう文と解されるようになる。

72. 他是犯了錯誤，出了問題了。

「カレハソウイウ人間ナノデアル」が当る。

このことの裏側の事実といえるだろうが、「是」はしばしば主題化された目的語の後にあらわれ、文全体を安定のよいものにする。

73. 謊是他撒過了，並且相当成功了。

また少し無理をすると（ポーズのおきかたを工夫するということ）、「是」は次のa～dのようにいろんな位置に生起する。

74. a 是酒他不喝。

b 酒是他不喝。

c 酒他是不喝。

d 酒他不是喝。

「是」は主題の範囲、逆にいえば残る判断の内容の部分の明解にするものともいえる。これらの差は客体的表現内容に属するものではない。話者が主張しようとするものの差に由来する。使いわけは話者の意向にゆだねられているのである。

ともあれ、「是」のこのようなはたらきは、一面からいえば、題述文、非題述文という区分のなかで位置づけることができるのではなからうか。「犬が兎ヲ追イカケル」という動詞文において、「犬」が単に行為主体にすぎない場合と、話手の主題として提起されている場合とが存在することは広く指摘されているが⁴¹⁾、「是」のこれまでみてきたはたらきは、これらの文を題述文として定着させる方向でいちじるしく寄与している。

主語（主格）に対するものは動作、主題に対するものは説明といえるが、題述文はつねに判断文であるといつてよい。動詞文がなおもちうるこの題述性を明示的にするもの、主張と化しうるものが「是」である。主題化されて提前されたものに「是」がつきやすいのは当然である。その

ことは行為主体として文頭にとどまる主格においても、話の場によっては、明示的形式をもたないけれどもあるわけで、一見なにげない「我去」が「我是去」になっても怪しむにたりない。

「是」が英語の be 動詞ともっとも異なる点は⁴²⁾、「Be a good boy !」のような命令文に出ないこと、および一文中になん度もあらわれず（関係節や不定法のように）、ただ一度だということ⁴³⁾などにみられるが、その意味するところは「是」が名詞文成立のための統辞論的形式語ではなく、話者が客体的事実の外から加える判断の表明、題述的主張の表明として生きているということを物語る。これはとても Locus といった代役のしろものではない。中国語とは題述的な言語、あるいは題述の表現を容易に成立させる言語であろうかと日頃疑うが、「是」はそれを裏書きする語として存在する。名詞文に「是」がつくことも、実はその題述性の結果であり、だからこそ Locus でない「是」が存在しても不思議ではない。（1974, 9, 16）

〔注〕

1. 1974年9月2日、アジア・アフリカ言語文化研究所における「言語情報の機械処理のための基礎的研究」の共同研究会において、本稿の一部について報告を行った。その際出席の諸教授より多くの示唆的な意見を得た。お名前を列記しないが、記して感謝の意を表わしたい。

表題にいう「ムード特性」とは modality の意味である。これまでの中国語研究をふり返って、ムードを扱うものはきわめて乏しい。その理由はなんといっても、屈折といった語法形式で表わされるムードが存在しないからである。J. Mullie 「The Structural Principles of the Chinese Language」, English transl. Peking, 1932 などの動詞の項には、直叙法、命令法、不定法などの別がたてられているが、これはいうまでもなくヨーロッパ語の文法の枠をもちこんだからにすぎない。多少ともこの種の枠の輸入に反省が出てからは、たえてムードが文法から姿を消す（もち論アスペクトなどは別である）。それは中国語に話者の主体的表現がないからではなく、それが狭義の文法形式として見出せないからである。ただ「語気」という名で文末助詞などが扱われることになる。しかしこれもややもすれば誤解されがちで、語気助詞が「口調をあらわす助詞」（たとえば北京語言学院編「合本中国語教科書」, 光生館本 317 頁）と訳されるにいたっては、甚しい reduce を強いられている。呂叔湘は文法要略（中巻204頁）で：「語気」可有広狭兩解。広義的「語気」包括「語意」和「語勢」。……語意，語勢，語氣三者の表現法也不相同。語意以加用限制詞為主，語勢以語調為主，而語氣則兼用語調与語氣詞。」とのべているが、「語調」の入ってくることがこの種の誤解のもとである。ともあれ、狭義の形式が問題にならないのは中国語として当然であり、それが語彙形式として出であろうことも当然予測される。本稿は文末助詞のみならず、それを「是」の本来的機能のなかに求めようと意図するものである。ムードについてもっとも組織的に扱ったものは張秀1957であるが、このなかではムードの語法形式による表示を「語気」、語彙形式による表示を「情態」として区別しているのは注意される。

2. John Lyons 1968, 322頁～323頁
3. be 動詞と become が stative+, -である点について、中国語もほぼ同じであることを李方桂教授が次のような例によって指摘している由、Hashimoto 1969, 76頁に注記がある。
（形容詞） 這個人好。→他好了。
（動詞） 他是兵。→他当了兩年兵。
4. 佐久間1959, 151～152頁
5. 同上155頁
6. たとえば、A. A. 龍果夫「現代漢語語法研究」, 科学出版社, 1958, 151頁。また、梁吟1957に諸家の扱いが詳しい。

7. 譚永祥1957。また、張靜1960の40頁にも二種に分ける必要が示されている。
8. 張靜1960の40頁
9. 同上21頁
10. 動詞から転成したような副詞である。たとえば、「顧不得，不由得，忍不住，好容易，連忙」など。
11. 後にのべるように、厳密にはこの文では文末に「吧」があることに注意しなければならない。その関連で、「是」が完全に随意的といいがたいところがある。
12. 張靜1960の24頁
13. 黎錦熙，劉世儒「中国語法教材」第2冊，255頁。また張靜1960の25頁注
14. これにもれる例はたとえば：「他只說沒有沒有，我說你自己当面說去，……。」，「但五太太只呆望着七老爺。」などいくらかもある。しかし一般的には、心理活動動詞や介詞構造状語をもつものや対比構文のものが普通である。たとえば：

(心理動詞) 人們只以為是風浪的顛覆。
我只希望能時時見到他。

(介詞状語) 他只^レ在月台上徘徊。
青煙只從^レ点着的一点^レ兒起。

(対 比) 高天海不^レ吱声，只^レ点点头。
只談管理監督，沒^レ考慮政治思想工作。
15. この点では「共」のような副詞と比較される。たとえば「他一生共^レ写了一六八篇童話。」
16. これも対比されるものが後に続くような場面を考えれば成立するであろう。
17. 注14にのべたが、存在を示す動詞「剩下，有」なども当然これに加えられるべきである。
18. これは程度の問題である。「只」がつねに客体的表現であるというのではない。このことは副詞一般の性格をどう見るにかかわっている。
19. 岩波中国語辞典にはむしろ「真是」という副詞がない。
20. 「大^レ為失望，頗^レ為嚴厲，最^レ為少見，甚^レ是懇切」などの類。また二音節の文語的形容詞が多いのも「很是」の特徴。次の二文を比較されたい。「伯父的工作是很緊張的：伯父的工作很是緊張」
21. 多くの例外は名詞文に近いところで見られる。たとえば「那年已是快到臘月的時候，他又帶領社員……」
22. 「凡是」などは、「有」などを除けば「是」なしで成立しない。ほとんど文頭にある。
23. 「可是」は典型的な接続詞であるが、生起するところは接続される文のはじめとは限らない。副詞と一致する。しかし次のような例の「可是」を接続詞でないとはいえない。問題は、ごく一部のものを除けば、中国語に本来接続詞はあるのかどうかという点である。「制錢雖說不興了，羅漢錢可是誰也不出手的」，「娜拉走后怎樣？別人可是發表過意見的」
24. 「第一是」，「首先是」などもこの類
25. たとえば次のような例である。「他滿面紅光，顯得年輕了很多。」。動詞というべきか副詞というべきか。この傾向は長い程度補語を導く「動詞+得」にすべていえる。
26. 王力1954の上冊157頁
27. 藤堂1956の132頁
28. 一般に直後に「是」をとる動詞とは次のようなものである。「不知是，說是，想是，算是，認定是，以為是，覺得是，當是，看作是，猜是，不懂是，象是……」
29. もっとも、一部には次のように文成分の一部に組みこまれることがある。このときは外のものとはいえない。「日子象飛也似的過去了。」
30. 横山宏「現代中国語における強調——とくに『是……的』を中心に——」，早稲田商学184号，1966。強調とは何かがもっと問題にされてよい。判断は強調と密接にかかわっている。Hashimoto 1969も「是」に emphatic marker を立てる。

31. もち論こうはいっても、主語の前や述語の前がつねに主体的表現であるとはいえない。時間詞や場所詞、さらに介詞構造がすべて主体的表現であるわけではない。しかし主体的表現を本務とする語がこの位置にしかあらわれないということは十分に考慮されてよく、それはシンタグマティックな連鎖の順序を追うだけの機能論では落ちこぼれるものである。構造主義的に厳密な機能論とは別に、いわば時枝文法的な文展開の原理のようなものが考えられねばならないことをいったものである。
32. たとえば文の完結という点では、渡辺実1971の100頁。芳賀綏「日本文法教室」、東京堂、1962、52頁～など。
33. 渡辺実「辞の連続——述語をめぐる四要素との関連において——」、国語学、第33輯79頁～94頁、1958、6月
34. 王力「中国文法中的繫詞」、漢語史論文集、科学出版社、212頁
35. 洪心衡1964
36. 藤堂明保1956の131頁
37. 泉井久之助「否定表現の原理——一つの意味論的分析——」、国語国文、第22巻8号530頁～544頁、1953、8月
38. b₂ も「吉田班長ガオマエニナニヤラセタイウノカ」のような反語としては成立する。いうまでもなく「什麼」は疑問詞でなくなっている。
39. フィルモアーの格文法においても be 動詞は proposition と対置される modality より導かれる。また Bach 1967では、Chomsky の基底部規則 vp→copula predicate を改め、“copula ‘be’ does not appear in the base but is inserted transformationally” とはっきりのべている。また、seem などについては三上章1970の42頁が興味ぶかい。
- またこのような文を次のように、「是」による兼語式のように理解する立場があるが、ここにのべたような立場からは相容れない。「有」の兼語式もこれに近い。兼語式というのは構造上の意味として使成をもたらすものに限った方がよい。

是吉田班長叫你于 有一個學生學習中文

40. Chao 1968の716頁
41. たとえば、黒田成幸「論理学上の主語」、「ことばの宇宙」1967、12月号
42. 英語の be 動詞との差は、Chao 1968, Hashimoto 1969などにくわしい。
43. 「是」が二度出るのはまれであるが、次のようなものがある。「这回可是全是之乎者也之類，一些不懂了。」、「你就是說棉花是白的，她都会搖頭。」。また「他一定不是我先前看的那個人。要是他，怎麼沒有老呢？」で、「要是是他」や「要是這個人是他」とはならない。
- 「是」の出にくい文としては現象文もそうである。

参 考 文 献

- Bach, Emmon 「Have and Be in English Syntax」, Language Vol. 43 No. 2, P 462-448, 1967
- Chao, Y. R. 「A Grammar of Spoken Chinese」, Univ. of California Press, Berkeley, 1968
- 郭中平「關於判斷詞“是”」, 語文學習, 1957年2期
- Hashimoto, A. Y. 「The Verb ‘to be’ in Modern Chinese」, J. W. M. Verhaar (ed.) 「The Verb, ‘Be’ and its Synonyms 4」. P 72-111, Holland, 1969
- 洪心衡「能願動詞，趨向動詞，判斷詞」（語文知識講話），新知識出版社，上海，1957年
- 洪心衡「孟子里的“是”字研究」，中国語文，1964年4期，285頁～294頁
- Li, Ying-che 「Sentence with BE, EXIST and HAVE in Chinese」, Language Vol. 48 No. 3. P 573-583, 1972
- 梁 吟「“是…的”式和省略說」，語文學習，1957年2期

- 三上章「文法小論集」，くろしお出版，東京，1970
- 佐久間鼎「日本語の言語理論」，厚生閣，東京，1959
- 邵君朴「“是，有，在”用法相通」，中国語文，1957年9期，27頁～
- 譚永祥「說“是……的”」，語文學習，1957年2期
- 藤堂明保「中国文法の研究」，江南書院，東京，1956
- 王 力「中国語法理論」，中華書局，北京，1954
- 渡部実「国語構文論」，塙書房，東京，1971
- 張 静「“是”字綜合研究」，河南人民出版社，鄭州，1960
- 張 秀「漢語動詞的語氣系統」，中国語文雜誌社編「語法論集」（第一集），154頁～174頁，北京，1957